



タイトル Title	パターン変数による人類学的基底の書き換えについての一論考 : ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を参照して
著者 Author(s)	小川, 晃生
掲載誌・巻号・ページ Citation	21世紀倫理創成研究,13:40-53
刊行日 Issue date	2020-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/81012039
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81012039">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81012039</a>

# パターン変数による人類学的基底の書き換えについての一論考 — ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を参照して —

小川 晃生  
神戸大学人文学研究科非常勤 講師

本稿は、E・トッドが提案した人類学的基底概念を社会学者T・パーソンズがかつて整理したパターン変数によって書き換える、という研究の一部である。この研究は、個人に外在しこれを制御している人類学的基底を行為者の主体的選択のジレンマとして書き換える、ということの意味している。本稿ではF・テンニースによるゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの差異を利用することでこの書き換えの一例を提示する。それは、権威主義的で不平等主義的な直系家族型現代社会とは行為選択において客体を所属本位的で無限定的にとらえる社会だ、というものである。そしてこうした例を踏まえて、本稿ではこのような書き換えをいかにして行うことができるか議論する。

## 1. 問題の所在

本稿は、E・トッドが提案した人類学的基底という概念<sup>(1)</sup>をT・パーソンズが行為選択のジレンマを記述するために使用したパターン変数によって把握し直すことでトッド人類学を主体的な行為選択のモデルに書き換える<sup>(2)</sup>、という研究（以下、本研究と記す）の一部である。本稿ではF・テンニースの古典的著作である『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を参照することで、本研究においてどうすれば人類学的基底をパターン変数によって書き換えることができるか議論する。

まず、本研究の概要について記述しておく。本研究で利用されるトッドの人類学的基底とは家族人類学者であるトッドが1980年代に提案したアイデアである<sup>(3)</sup>。この概念は農村環境下における家族システムの規範の多様性と、政治イデオロギーや経済実践のような現代社会のある種の価値・規範の多様性との相関関係<sup>(4)</sup>を主張する。例えば、ロシアや中国にかつて存在した共同体家族システムに内在する権威主義と平等主義との組み合わせが近代の両地域における共産主義の興隆

と相関する、という議論がこの概念によって展開される<sup>(5)</sup>。この人類学的基底概念は近代政治イデオロギーの地域ごとの多様性に対して新しい説明を付加した点で注目されたが、他方でこの概念とイデオロギーとの相関性そのものは倫理的な意味を持たない、もしくは倫理的な両面性がある、と解釈されている点も重要である。例えば、かつての日本や中央ヨーロッパでみられた権威主義と不平等主義が組み合わさった直系家族システムは社会民主主義とナチズムのどちらとも相関関係を有するとされる<sup>(6)</sup>。このように人類学的基底とイデオロギーとの相関性は比較的簡明に記述されるが<sup>(7)</sup>、経済実践などについての議論は事情が異なる。その理由は以下の通りである。例えばトッドが人類学的基底を記述するのに使用する「平等主義」の最初の定義は、家族システムでの遺産相続において子どもたちに均等な財産分与がなされることである (Todd 1983=2008 : 42)。これが人類は「対称」であるという先験的確信と相関性があると見なされる (Todd 1994=1999 : 50 - 52)。他方でトッドによれば、権威主義と不平等主義が組み合わさった直系家族システムにおける財産を分割せずに親から子へと伝承してゆく遺産相続システムは、私有財産の著しい格差が無いという意味で経済的に平等主義的な社会と結果的に相関する (Todd 1994=1999 : 194)。つまり、人類学的基底を記述する際に使用される「平等主義 — 不平等主義」のような概念と、経験的な社会を記述するのに使用される「平等主義 — 不平等主義」という概念はその位置づけが異なる場合がある<sup>(8)</sup>。この相違点が人類学的基底概念を社会科学に適用し難しくしてきたのであり、それを簡単に整理するためには人類学的基底概念と関連させつつ経験的な社会を記述するための別の「枠組み」が必要である。

このような「枠組み」として本研究で注目したのがパターン変数である。パターン変数は 20 世紀中葉のアメリカを代表する社会学者であったパーソンズが提案した概念であり、五つの軸によって行為選択のジレンマを表現するものである (Parsons and Shils 1951=1960 : 122 - 123)。このパターン変数は主意主義的行為理論というパーソンズが考案した研究の枠組みに準拠している。主意主義的行為理論とは要するに自我を持つ行為者の価値合理的な主体的行為選択を重視する行為理論であり、例えばこの行為理論は行為者に外在する社会的事実が行為者を拘束するとみなすデュルケム実証主義を、行為者に内在する社会的事実が行為者の自発的なふるまいとしてそれを拘束すると再解釈した (Parsons 1937=1982 : 110 - 120)。つまり、人類学的基底をパターン変数によって書き換えることは上

述した相違点を簡単に整理するだけでなく、行為者に外在しそれを制御する人類学的基底を行為者の主体的な選択の集積として書き換えるということもまた意味している。このような書き換えを行うことによって、人類学的基底という画期的アイデアが行為選択のジレンマを中心的なテーマとする社会科学の特定の領域で利用しやすくなる。

ところで、これまで素描してきた本研究には問題がある。トッドの人類学的基底概念は農村環境下でかつて存在した家族システムに基づいて現代社会の共時的比較のための枠組みを提供するが、この概念はパーソンズの時代に存在しない。つまりパターン変数概念は人類学的基底を想定していない<sup>(9)</sup>。だからこそ、後述するようにパーソンズは『社会類型』などでの議論で「近代化」という単一の尺度に依拠した。そこで本稿では、パーソンズとトッドの両者が共に言及するテンニースのゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を参照する。この概念を参照することで前述した困難を乗り越えて両者の関係性を可視化し、人類学的基底をパターン変数によって書き換える、という本研究の目的のために適切な手段を議論する。

## 2. ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念についての素描

ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念はテンニースの古典的なアイデアであり人文社会系の諸学問ではよく知られるが、本稿では先行研究に依拠せず Tönnies (1887 = 1953) を直接参照して本稿の議論と関係する部分だけを要約しておく。

ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を経験的に可視化する代表的な例は居住形態である。ここではゲマインシャフト的な家族、農村、町、都市とゲゼルシャフト的な大都市とが対比されている (Tönnies 1887 = 1953 : 334 - 335)。ここで重要なのは大都市が単に農村や町と比べて人口が多いという量的な問題ではなく、そこでの人々の生活様式が質的に異なるということである。テンニースによるならば、ゲマインシャフトとは「本来のあるいは自然的状態としての人々の意志の完全な統一」(Tönnies 1887 = 1953 : 22) を出発点とする有機的な共同体なのであり、テンニースはその基本を血縁関係だと見做していた (Tönnies 1887 = 1953 : 22)。テンニースにおいてゲマインシャフトのもっとも一般的な表現は家族である (Tönnies 1887 = 1953 : 42)。そしてテンニースによれば、ゲマイン

シャフトを結びつけているのは「人間を一つの全体の部分として統合する特殊な社会的力であり、社会的共感である」(Tönnies 1887 = 1953 : 37) ところの「了解」である。テンニースはこのようなゲメインシャフトを特定の土地と結びつくものだと見做し (Tönnies 1887 = 1953 : 298 - 299)、また本質意志という概念と関連させている。本質意志とは人間に生まれながらにして備わっているような「先天的・遺伝的な意志」(Tönnies 1887 = 1953 : 127) であり、それには適意、習慣、記憶という三つの形式があるとされる。テンニースは本質意志のこの三つの形式が「一つの全体または統一を形成している」(Tönnies 1887 = 1953 : 144) と主張するが、このように共通した本質を有する複数の形式が相互連関しつつ統合しているという考え方がテンニースにおけるゲメインシャフトや本質意志といった概念の基本的枠組みである。

他方で、テンニースはゲゼルシャフトを孤立して緊張状態にある個々人の集まりだと見做した (Tönnies 1887 = 1953 : 64)。このようなゲゼルシャフトにおける人々は自分たちの排他的な所有権を前提としつつ (Tönnies 1887 = 1953 : 65)、それを生産するのに必要な労働量という単一の基準によってその価値が測定される (Tönnies 1887 = 1953 : 69) ところの商品を「交換」しながら生活している。このようなゲゼルシャフトにおいて人々を結びつけているのは「契約」に他ならない (Tönnies 1887 = 1953 : 74)。テンニースはゲゼルシャフトを特定の土地や血縁に拘束されないものだと見做し<sup>(10)</sup>、それが無限に拡大してゆくことで「世界市場」(Tönnies 1887 = 1953 : 86) や「世界共和国」(Tönnies 1887 = 1953 : 325) が成立すると主張した。テンニースはこのようなゲゼルシャフトを選択意志という概念と関連させている。選択意志とは、その主体である「自我」(Tönnies 1887 = 1953 : 126) が、思惟された目的に役立つ活動ないし行為を選択するというものである (Tönnies 1887 = 1953 : 150)。テンニースはこの選択意志において目的と手段を区別しており (Tönnies 1887 = 1953 : 153)、また目的に対する適切な手段を選択することを阻害する道徳的・感情的判断を選択意志が排除すると見做した<sup>(11)</sup>。

以上の議論を纏めておこう。テンニースは人間の生活様式をゲメインシャフト・ゲゼルシャフトという二項対立的な図式で要約する。前者は人間が生来的に持つ意志を基盤にしつつ相互連関的な統一を形づくる有機的共同体であり、それは血縁や特定の土地と密接に関連する。他方で後者は原子論的な自我の主體的な行為

選択が基盤であり、それは血縁や特定の土地と結びつかずに無限に拡大してゆく。このようなゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念に対する理解を前提としつつ、以下の議論を展開してゆく。

### 3. 人類学的基底とゲマインシャフト・ゲゼルシャフト

本項ではトッドの人類学的基底概念についてテンニースのゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念と関連させて議論する。

本稿の最初で記述したように、トッドの人類学的基底は農村環境下での家族システムの規範の共時的多様性と現代社会システムの共時的多様性との相関性を主張する概念である。その出発点は家族社会学者F・ル＝ブレから引用した自由— 権威主義、平等— 不平等主義という家族システムの規範の二軸である。ここでの自由— 権威主義は「成人した子が親と同居しない— する」という規範に由来し、他方で平等— 不平等主義は「遺産相続における子への財産分与が均等である— ない」という規範に基づく (Todd 1983 = 2008 : 42)。トッドはこの二つの軸に基づいて絶対核家族 (自由— 不平等)<sup>(12)</sup> (イギリス、アメリカ)、平等主義核家族 (自由— 平等) (フランス北部)、直系家族 (権威— 不平等) (ドイツ、日本)、共同体家族 (権威— 平等) (ロシア、中国) という4つの家族類型を提示している。そして人類学的基底概念に基づくならば、例えば近代ロシアにおける権威主義的で平等主義的な共産主義の興隆はかつての農村ロシアに共同体家族システムが存在したことと相関している。

ところで、トッドは直系家族システムについての議論を展開するなかでゲマインシャフト概念に言及している。トッドの主張に基づくならば、直系家族システムと相関する現代社会とは階層化された人々が強固に統合された社会である。直系家族システムにおける家族規範としての権威主義が「個人は集団に強固に統合されているものだという考え方」(Todd 1994=1999 : 193) と相関し、不平等主義が「諸集団は互いに異なるのみならず、系統的に上と下を区別する秩序関係に組み込まれているという捉え方」(Todd 1994=1999 : 193) と相関する、とトッドはここで議論している。トッドがこのような直系家族型現代社会とゲマインシャフト概念とを端的に関連させたのが、まさに以下の引用文である。なお、トッドが「ドイツ＝日本の強力な統合に、アメリカ・モデルの絶対的個人主義が対比される」(Todd 1994 = 1999 : 95) と主張していることにも言及しておこう。

それはとりわけ安定してしっかり根を下ろしていた農村世界の崩壊が生み出した重大な問題をのり越えて、伝統的直系家族の特徴であった、個人の集団への強固な統合を見事に再び見出すにいたった脱工業化社会である。フェルディナンド・テンニエスの言うゲメインシャフト、閉ざされた階層序列世界は、大半が農村から成る世界においてのみ実現可能と信じられていたものだが、それは誤りであって、直系家族型社会はそのゲメインシャフトを他ならぬ脱工業化社会に移し換えることを成し遂げたのである。(Todd 1994 = 1999 : 94)

前述したようにテンニースはゲメインシャフトを人間が生来的に持つ意志を基盤にしつつ相互連関的な統一を形づくり血縁や特定の土地と密接に関連する有機的共同体だと見做していた。直系家族型現代社会はもはや血縁や特定の土地と密接に関連していないかもしれないが、相互に異なる人々の統合という意味での有機的共同体そのものやそれを肯定的に捉える価値は現代ドイツや日本に存在し続けているとトッドは主張している。

ところで、上述したようにトッドはゲメインシャフト的な現代ドイツ・日本と個人主義的アメリカを対比させている。では絶対核家族型社会としての現代アメリカ社会をゲゼルシャフト的社会と定義して良いのかというと、以下の理由によって留保が必要である。これまで本稿では繰り返しトッドの人類学的基底概念を説明してきたが、実際にはトッド人類学は人類学的基底と文化的テイクオフという二つの概念によって構成されている。文化的テイクオフとは経済的テイクオフに先行する人間の精神的な進歩であり<sup>(13)</sup>、近代化プロセスの根本的な推進力だとトッドは主張している (Todd 1984=2008 : 298 - 306)。トッドの主張するところによれば、このような文化的テイクオフは「個人主義」を促進する<sup>(14)</sup> 一方で人類学的基底の質的な性質に影響を及ぼさない<sup>(15)</sup>。つまりトッドが記述する現代社会とは、個人主義が伸長しつつも人類学的基底と相関する性質を保持し続ける社会である。この点は現代アメリカ社会を記述する上で問題を引き起こす。何故なら、自由 — 不平等主義 (正確には平等への無関心) 的なアメリカの人類学的基底 (絶対核家族システム) それ自体がある意味で個人主義的だからである。トッドの議論を参照するとき、現代アメリカ社会は人類学的基底と文化的テイク

パターン変数による人類学的基底の書き換えについての一論考  
— ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を参照して —

オフの両者に基づいた個人主義的社会として記述できる<sup>(16)</sup>。前者は積極的で強い規範としての個人主義でありパーソンズの指摘した「制度化された個人主義」に通じるが、後者は人類学的基底の質的性質に干渉しないという意味でそれより弱く消極的である。ところで、テンニースにおけるゲゼルシャフト概念を改めて参照しておこう。前述したように、原子論的な自我の主體的な行為選択を基盤としたゲゼルシャフトは血縁や特定の土地と結びつかずに無限に拡大してゆく、というのがテンニースにおけるゲゼルシャフト概念の要旨である。ここにおいてゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの変動(Tönnies 1887 = 1953 : 331)というテンニースの議論をトッドの使用する概念で書き換えるとき、それは「農村環境下の家族システムそのものの解体」と「それに随伴した人間の精神的な進歩による主體的自我の確立」に他ならず<sup>(17)</sup>、ゲゼルシャフト概念を人類学的基底としての絶対核家族システムと安易に関連させるべきでない。以上の理由から、トッドにおける直系家族型ドイツ・日本と絶対核家族型アメリカとの対比を、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの対比と本稿では同一視しない。

このようにゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの差異をそのまま使用できないという意味での留保があるとはいえ、トッドは確かに直系家族型社会をゲマインシャフト的な社会として把握している。そこで本稿では、農村社会と現代社会とでは血縁や特定の土地との関連が大きく異なるということに注意しつつも、権威主義的で不平等主義的だと記述される人類学的基底としての直系家族システム<sup>(18)</sup>とゲマインシャフトとを関連させる。

#### 4. パターン変数とゲマインシャフト・ゲゼルシャフト

本項ではパーソンズのパターン変数概念をテンニースのゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念と関連させて検討する。本稿の序論で確認したようにパターン変数とは、ジレンマに直面した行為者が行う行為選択を五つの二項対立軸で記述したものである(Parsons and Shils 1951=1960 : 122 - 123)。このパターン変数は「志向」とその「客体」という基本的要素によって記述される行為概念、という1950年代当時にパーソンズが依拠していた概念図式を前提としている。パターン変数の五組は以下の通りであった。



- (1) 感情性 — 感情的中立性
- (2) 自己中心的な志向 — 集合中心的な志向
- (3) 普遍主義 — 個別主義
- (4) 所属本位 — 業績本位
- (5) 限定性 — 無限定性

Parsons and Shils (1951=1960 : 124 - 125) に基づく

この五組のうち、(1)、(2)、(3) は行為を構成する「志向」の選択の分析から導出され、(4)、(5) は「客体」をどう捉えるべきかという問題についての検討から構成された (Parsons and Shils 1951=1960 : 123 - 124)。本稿では後者の意味だけを簡単に記述しておこう。「所属本位 — 業績本位」とは、客体が何を成し遂げるのかに注目するのか (業績本位)、それとも客体が何を成就するのかと無関係にそれがあらかじめ有している特質に注目するか (所属本位)、というジレンマを指す (Parsons and Shils 1951=1961 : 105)。他方で「限定性 — 無限定性」とは、客体が自我にとって制限された意味しか持たずその範囲でのみ客体に対する義務を負うか (限定性)、それとも客体が自我にとって無制限の意味を持ち客体に対する義務を際限なく負うか、というジレンマを意味する (Parsons and Shils 1951=1961 : 93 - 94, 138 - 139)。パーソンズはこのようなパターン変数によって記述される行為選択の一貫性を「価値」だと見做しており (Parsons and Shils 1951=1960 : 126)、それは文化システムの諸型を形成し社会システムに「制度化」されパーソナリティに「内面化」されることによって、行為システム全体を相互関連させるものだと見做されていた (Parsons and Shils 1951=1960 : 42)。

さて、このようなパターン変数の形成史にゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念は重要な貢献をしている。というのも Parsons and Shils (1951=1960 : 78) などで指摘されているように、パターン変数はテニースにおけるゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの二分法とウェーバーの行為の四類型に対する不満に基づいて構築されたものだからである。F・シャゼルはゲマインシャフト概念が感情性・無限定性・個別主義・所属本位という四つの選択に分解され、同様にゲゼルシャフト概念が感情中立性・限定性・普遍主義・業績本位に分解されることを示している (Chazel 1974=1977 : 62) <sup>(19)</sup>。

パターン変数による人類学的基底の書き換えについての一論考  
— ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を参照して —

この「分解」で注意すべき点が二つある。一つは、自我の主體的な行為選択のジレンマというパターン変数の定義に関連する。テンニース自身の議論を参照すればわかるように、人間が生来的に有する意志を基盤に相互連関的な統一を形成する有機的共同体というゲマインシャフトの定義には主體的な行為者が含まれない。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの変動というテンニースの議論の要旨は、まさにここでいう主體的な自我を持つ行為者が出現したということに他ならない。他方でパターン変数概念は、例えばゲマインシャフト的な所属本位とゲゼルシャフト的な業績本位とを主體的自我を持つ行為者が選択する、という様子に基づいている。このような文脈の相違の一方で、二つ目の注意点として両者の共通項を取り上げることもできる。それは端的に言えば、両概念が前近代から近現代へという進化論的文脈を共有している点である<sup>(20)</sup>。例えば所属本位 — 業績本位は、客体があらかじめ有している特質に基づいて評価される前近代社会から何を成し遂げたのかによって客体を評価する近現代社会へ、という文脈にしばしば埋め込まれる<sup>(21)</sup>。前項の議論を参照すればわかるように、この文脈はトッドの人類学的基底概念が排除するものである<sup>(22)</sup>。

## 5. 人類学的基底の書き換えはどのようにして行われるべきか

これまでの議論を参照するならばゲマインシャフト概念を媒介として、行為者を外在的に拘束する人類学的基底としての直系家族システムを主體的な行為選択の差異として書き換えることができる。ただし、本稿では客体の取り扱いに関係した(4)所属本位 — 業績本位、(5)限定性 — 無限定性の二つのパターン変数のみを使用する。結論を記述するならば、権威主義的で不平等主義的な直系家族型現代社会とは行為選択において客体を所属本位的で無限定的にとらえる社会だ、ということになるだろう。これは、客体が何を成就するのかと関係なくそれがあらかじめ有している特質に注目し(所属本位)、また客体が自我にとって無制限の意味を有し客体に対する義務を限りなく負う(無限定性)、という二つの傾向がドイツや日本のような直系家族型現代社会において「人間の精神的な進歩」と共存していることを意味している<sup>(23)</sup>。

本稿で提示したこれまでの議論はいわば学説史的な「接続」である。ただし、この作業はパーソンズ社会学とトッド人類学とを論理的な意味連関によって結び付けているのではない。既述のようにパターン変数概念は社会進化論的な文脈に

しばしば埋め込まれ、他方で人類学的基底概念はこの文脈を排除するわけだから、両者の意味連関を論理的思考によって検討するのは困難である。それに対して本稿の議論の根底にあるのは、前近代的な農村社会におけるゲマインシャフトと直系家族型現代社会としてのゲマインシャフトとの経験的類似性である。結局のところ、人類学的基底概念それ自体が以前の時代に存在しない画期的なアイデアだったわけだから、その書き換えは先行研究に依拠した論理的思考というよりも経験的社会的観察に基づかなければならない。本稿ではこの視点に留意しつつ学説史の範疇でこれまでの議論を行った。

本稿と同様の手法に基づく人類学的基底概念の書き換えは小川晃生（2018）でも試みられている。それはパーソンズが主著の一つである『社会体系論』でパターン変数を使用した共時的比較を例外的に試みていること（Parsons 1951=1974：187 - 205）を利用して、共時的比較という共通項を基に人類学的基底をパターン変数に機械的に書き換えるというものである<sup>(24)</sup>。その結論は人類学的基底としての直系家族システムを所属本位と無限定性によって記述することができ、普遍主義や集合中心的な志向で記述できるかどうか保留するというものであった（小川2018：113）。つまり「客体」に関連する所属本位 — 業績本位、限定性 — 無限定性のパターン変数については小川（2018）と本稿との結論が一致したといえる。

このように学説史的研究は本研究に一定の成果をもたらしたが、この手法で説明できないことも多い。例えば本稿序論で提示したように、直系家族型社会は権威主義的で不平等主義的なイデオロギーと相関しつつも経済的に比較的平等な社会とも相関すると見做されている。この二つ相関をパターン変数によって書き換えるのであれば、学説史的研究の範囲を超えてそれぞれの経験的文脈を参照しなければならない。そうすることで、パターン変数による書き換えはこの二つの相関の差異を整理し、また主体的な行為選択の集積という経験的な社会科学で取り扱い易い形式に人類学的基底概念を書き換えるだろう。

## 6. 結論

本稿ではトッドの画期的なアイデアだった人類学的基底概念をパターン変数によって主体的な行為選択のジレンマとして書き換える、という本研究がどうすれば可能なのか議論した。本稿ではその一例として、テンニースやパーソンズが想

定する農村社会のゲマインシャフトとトッドが主張する直系家族型現代社会としてのゲマインシャフトとの経験的類似性に基づき、権威主義的・不平等主義的な直系家族型現代社会を行為選択において客体を所属本位的で無限定的にとらえる社会として書き換えた。このように論理的な意味連関の飛躍を含む議論は倫理学などの人文学において評価され難いかもしれないが、経験的な社会を良く説明できる一方で検証に基づいて批判可能なモデルを作るという社会科学的な目的には貢献するはずだ。他方で、このように文献を参照するだけではやはり限界がある。文献の読解という基礎を疎かにせずに、今後は経験的な調査研究を利用して本研究を推進して行きたい。

## 註

- (1) トッドは Todd (2011=2016) において家族システムの生成、変動、伝搬を主要なテーマとして扱い、不変の人類学的基底が偶然に分布しているという初期のアイデア (Todd 1983=2008: 289 - 293) から完全に脱却した。ところが前掲書で想定される家族システムの変動モデルは数百年、数千年という長期的な時間軸に依拠しており、本稿で取り扱う近・現代社会の共時的比較というテーマにとってそこでの議論は周縁的である。したがって本稿では前掲書の議論を基本的には参照しない。
- (2) 小川 (2019) では人類学的基底をパターン変数によって「表現」という曖昧な定義がなされていた。
- (3) Todd (1983 = 2008) の議論全般を参照せよ。
- (4) 大澤真幸 (2019: 620 - 621) が指摘しているように、人類学的基底概念が主張するのは基本的には相関性であって因果性ではない。
- (5) Todd (1983=2008: 77 - 106) を参照せよ。
- (6) Todd (1983=2008: 157 - 162) などを参照せよ。なお、このことは小川 (2018: 4) などでも言及されている。
- (7) そもそもトッドが人類学的基底を記述するために使用した権威 — 自由主義、平等 — 不平等主義という二軸は家族社会学者ル＝プレがフランス革命のスローガンをヒントに構築したものである (Todd 1983=2008: 42 - 43)。つまりこの二軸自体がイデオロギー・システムの所産だから、それによるイデオロギーの記述は容易なはずだ。

- (8) 小川 (2018) では、農村環境下での人類学的基底がパターン変数によって産業社会での作動として表現し直される、というモデルが提案されている (小川 2018 : 70)。ところが、本稿で引用した不平等主義的基底と経済的平等主義との相関性というトッドの議論 (Todd 1994=1999 : 194) は産業化されていない農村内部についての記述であり、前述した小川 (2018) のモデルは常に適当とは言えず、本稿での「位置づけの相違」という議論がより妥当だと思われる。
- (9) 小川 (2019) では「共時的比較と親和性が強い人類学的基底概念は、パターン変数と相性が悪いように思える」(小川 2019 : 308) と指摘され、それにもかかわらず両者が関係しうることが示唆されている。本稿ではこの点がより詳細に議論される。
- (10) 商人階級にとって「場所と場所とを結びつける線や、国道や、移動の手段だけが問題」(Tönnies 1887=1953 : 85) だという記述に基づいてゲゼルシャフトが特定の土地に拘束されないと記述した。またゲゼルシャフトが血縁関係に拘束されないと記述は、Tönnies (1887=1953 : 84) などにおいて、血の結合体として定義されたゲマインシャフトがゲゼルシャフトと対比的に論じられていることなどに基づく。
- (11) Tönnies (1887=1953 : 164 - 165) や Tönnies (1887=1953 : 167 - 168) を参照して記述した。
- (12) 正確には、絶対核家族は不平等ではなく「平等への無関心」として記述される (Todd 1983=2008 : 201)。
- (13) Todd (1983=2008) の議論全般を参照せよ。なお文化的テイクオフは識字率の継続的上昇と相関するとされる (Todd 1984=2008 : 370-371)。
- (14) Todd (2002=2003 : 83) などを参照して記述した。
- (15) このように解釈しなければ現代社会の共時的比較を主張する人類学的基底概念はその意味を失う。
- (16) この点は小川 (2018 : 84 - 85) や小川 (2019 : 308) でも言及されている。
- (17) それが存在する土地と密接な関係を有するとされる人類学的基底と伝搬してゆく文化的テイクオフとが対比されている (Todd 1984=2008 : 324) ことに注意を促したい。この指摘を踏まえれば、テンニースの主張する拡大してゆくゲゼルシャフトは後者との親和性が強い。

- (18) 「人類学的基底としての」という表現は、家族システムそれ自体ではなく現代社会の共時的比較に使われる性質を表現する道具としての家族システムを指す。確認しておくが、農村環境下の家族システムは現代社会においてそのままの形で存続していないというのがこの議論の前提である。
- (19) パターン変数の訳出を Parsons and Shils (1951=1960) に合わせた。
- (20) 小川 (2018 : 45,70) などでも引用されていることだが、川越次郎 (2002 : 196) はパターン変数が近代・伝統の二分法の系統的整理であるという議論の存在に触れている。またパーソンズと社会進化論との関連については松岡雅裕 (1998) をみよ。
- (21) Parsons (1966=1971) の議論全般を参照せよ。
- (22) 小川 (2019 : 307 - 308) でも言及されている。
- (23) 議論の正確さを犠牲にしてさらに分かり易く記述すれば以下ようになる。すなわちこのモデルにおける直系家族型現代社会の行為者は、他者を「家柄」などの「所属」によって評価し、また自分と他者との関係性を「職場」などだけの限られたものに止めない傾向がより強い。そして、この傾向は周囲の環境や自分たち自身について認識し思考する彼らの能力が向上しているにもかかわらず存続するのであり、近代化の「遅れ」という尺度でこの傾向を説明できない。
- (24) 例えば『社会体系論』における「ドイツ社会」のパターン変数による記述 (Parsons 1951=1974 : 195 - 198) と人類学的基底による「ドイツ社会」の記述 (Todd 1983=2008 : 107 - 162) とが機械的に連関させられている (小川 2018 : 98)。

## 引用・参考文献

- Chazel, F. 1974 *La theorie de la société dans l'oeuvre de Talcott Parsons*, Paris: Mouton  
(= 酒井正三郎訳 1977 『社会の分析的理論 — タルコット・パーソンズの著作における —』 中部日本教育文化会)
- 川越次郎 2002 「「パタン変数」の批判的再構成:三つのテキストにおけるパラドックスを中心に」『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』 41 : 185 - 204
- 松岡雅裕 1998 『パーソンズの社会進化論』 恒星社厚生閣
- 大澤真幸 2019 『社会学史』 講談社現代新書

- 小川晃生 2018「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究 — パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として —」神戸大学大学院博士学位論文 神戸大学学術成果リポジトリ Kernel にて全文公開済み
- 2019「二一世紀におけるトッド的な T・パーソンズ再解釈についての一考察 — 人類学的基底の表現としてのパターン変数という文脈に基づいて —」『社会学雑誌』 35・36：304 - 318
- Parsons, T. 1937 *The Structure of Social Action*, New York; London: McGraw-Hill (= 稲上毅、厚東洋輔共訳 1982『社会的行為の構造 第三分冊デュルケム論』木鐸社)
- 1951 *The Social System*, Glencoe, Illinois: The Free Press (= 佐藤勉訳 1974『社会体系論』青木書店)
- 1966 *Societies: Evolutional and Comparative Perspectives*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc. (= 矢沢修次郎訳 1971『社会類型 — 進化と比較』至誠堂)
- Parsons, T. and Shils, E. A. ed. 1951 *Toward a General Theory of Action*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press (= 作田啓一ほか訳 1960『行為の総合理論をめざして』日本評論社)
- Tönnies, F. 1887 *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft (= 杉之原寿一訳 1953『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト — 純粹社会学の基本概念』理想社)
- Todd, E. 1983 *La Troisième planète*, Paris: Éditions du Seuil (= 石崎晴己訳 2008「第三惑星」『世界の多様性 — 家族構造と近代性』藤原書店：31 - 294)
- 1984 *L'Enfance du Monde*, Paris:Éditions du Seuil (= 石崎晴己訳 2008「世界の幼少期」『世界の多様性 — 家族構造と近代性』藤原書店：295 - 510)
- 1994 *Le Destin des immigrés*, Paris: Éditions du Seuil (= 石崎晴己ほか訳 1999『移民の運命〔同化か隔離か〕』藤原書店)
- 2002 *Après l'empire :essai sur la décomposition du système américain*, Éditions Gallimard (= 石崎晴己訳 2003『帝国以後』藤原書店)
- 2011 *L'Origine des systèmes familiaux Tome1:L'Eurasie*, Paris : Éditions Gallimard (= 石崎晴己監訳 2016『家族システムの起源 I ユーラシア上下』藤原書店)